或 問　WAKUMON 167
No. 9 (2005) pp. 167～168

西学東漸研究の日文・中文文献情報

論文

1. 「化学原子論和分子学説在清末民初的伝播」袁振東『自然科学史研究』2005 第 24 巻第 1 期 72-83 頁
2. 「『大英国志』與晩清国人対英国歴史的認識」鄒振環『復旦学報（社会科学版）』2004 第 1 期 40-49 頁
3. 「丁福保與近代中日医学交流」牛亜華・馮立昇『中国科技史料』2004 第 25 巻第 4 期 315-329 頁

著書

1. 『漢文脈の近代　清末=明治の文学圏』齋藤希史 2005 名古屋大学出版会 322 頁
   著者の十余年既発表の論文の集である。
2. 『清代中日学術交流の研究』王宝平 2005 汲古書院 610 頁
   本書は、王宝平氏が 2003 年に関西大学に提出された学位論文を増補・訂正したものと「書後私語」にある。王氏のこれまでの研究の集大成と言えよう。2 部 17 章から成る。第一部は「人による学術交流」、第二部は「書物による学術交流」。堅実な考証が光る。陳捷氏の著と合わせて読めば、明治一代の日中文化交流の全容がかなりの程度まで明らかになるだろう。
3. 『近代中国の地方自治と明治日本』黄東蘭 2005 汲古書院 412 頁
   序章、終章の他に 4 部 10 章から成る大著。4 部のタイトルは次の通り、
   第 I 部　近代地方自治制度——予備的考察
   第 II 部　伝統中国の自治
   第 III 部　二〇世紀初頭中国人の地方自治論と日本
   第 IV 部　近代中国における地方自治制度の受容と変容
4. 『明治前期日中学術交流の研究』陳捷 2003 汲古書院 594 頁

以下中国書

5. 『従四部之学到七科之学——学術分科與近代中国知識系統之創建』左玉河 2004 上海書店出版社 468 頁

本书由以下九章构成:

第一章 中国传统学术分类及其特征

第二章 典籍分类与中国知识系统之演进

第三章 西方分科观念的传入及早期学术分科

第四章 分科观念的普及与“七科之学”的奠基

第五章 近代“格致学”诸门类的移植

第六章 近代“法政诸学”各门类的初建

第七章 中西学术配置及近代知识系统的雏形

第八章 典籍分类与近代知识系统之演化

第九章 中国旧学纳入近代知识体系之尝试

本书讨论近代知识体系在中国建立之过程，多有精辟之论，唯有一处资料似有误。223 页:

> 1857 年 10 月发行之《六合丛谈》，伟烈亚力多次提到“化学”一词。其云:“化学中之变化，俱能生热。”又曰:“一论化学，言新得一物，其宝贵如金刚石。金刚石有二物同质，而皆寻常物也。”还说:“按化学之力于重学之力不同，（？）能强加于他物者，谓重学之力，二者是以别之。”他解释说:“一方面论物质之性质，一方面论其变化:则质学（或物质学）与‘化学’两种译名，均系译意，且系各注重其一方面，其恰当之程度一亦约略相等，颇为明显。惟‘化学’现为习见之名词，则一般读者未免觉其甚惯耳。”

脚注指示参见《六合丛谈》1857 年 11 号伟氏“英格兰大公会会议”一文。“1857 年 10 月发行之《六合丛谈》”不可解，该志共出现“化学”11 次，10 月号没有用例，11 号有 4 例引文脱漏一句（引文中问号处）:“盖万物之质，能自然变化者”，以至文意不甚通畅。尤其是“他解释说”以下，按行文语气应是伟烈氏的意见，但不见于《六合丛谈》。

6. 『中国観念史』苑淑娅編 2005 中州古籍出版社 730 頁

『中国哲学前沿叢書』の 1 冊、「通論編、先秦編、漢唐編、宋明編、晚清民国編」に分けられ、哲学あるいは社会学等の概念の成立、導入を考察する中国（海外の学者も含む）、日本の学者らの論考を集めた論文集である。

7. 『赫德日記』費正清等編・傅曽仁等訳 2003 中国海関出版社

沈 国威輯